

## 咳ぜんそくは

## 気管支ぜんそくと

## どう違うの？

# A

ほかに症状がなく  
咳だけが続くのが  
咳ぜんそくの特徴です

咳ぜんそくも気管支ぜんそくも、気管支の粘膜に炎症が起こることによって、気道（空気の通り道）が過敏になり、ちょっとした刺激でも咳が出るようになる病気です。どちらも慢性的な咳が特徴ですが、症状には大きな違いがあります。気管支ぜんそくは、痰が絡んだ咳が長く続くほか、呼吸をする際にゼーゼー、ヒューヒューといった雑音を発する喘鳴や、呼吸困難などの症状が表れ、重症の発作を起すこと死に至ることもあります。咳や発作は治療によって抑えることもできますが、完治が難しい

病気のひとつです。一方、咳ぜんそくは痰を伴わない空咳がある程度続いて止むという症状が、断続的に表れます。正しい治療で治せますが、患者の約3割が気管支ぜんそくに移行していることから、「咳ぜんそくは気管支ぜんそくの前段階」ともいわれています。たとえば、風邪をひいた後に長く咳だけが残っている、咳止めが効かない、夜中から早朝にかけて激しい咳が出るといった場合は、咳ぜんそくの疑いがあります。咳以外の症状がないために放置する人も多いようですが、2カ月以上にわたって咳が続くときは、まづかかりつけ医に相談し、専門医を紹介してもらいましょう。



監修

川崎医科大学附属病院  
呼吸器内科 加藤 茂樹 医長  
倉敷市松島577 TEL.086-462-1111

### 治療 咳が治まった後もしばらくは炎症を抑えるための治療が必要

咳ぜんそくが疑われる場合はまず、気道を広げる気管支拡張薬が用いられます。診断の難しい病気ですが、この薬によって咳が治まると、咳ぜんそくという診断が確定し、粘膜の炎症を抑える吸入ステロイド薬での治療が開始されます。

最近では、気管支拡張薬とステロイド薬を配合した、短期間（1週間から1カ月）で症状が治まる吸入薬を使用されることもあります。この配合薬は吸入の操作が簡単なので、長時間作用するため1日2回の吸入ですみます。

また、吸う力が弱い人や吸入の操作が難しい人には飲み薬が処方されることもあります。

いずれにしても、咳が治まったからといって治療を中断すると再発のおそれがあります。粘膜の炎症が治まるまでには最低6カ月間の吸入治療が必要ですので、医師の指示どおりに根気よく治療を続けることが重要です。



### 予防 日常のちょっとした心がけで治療が長引く咳ぜんそくを予防

咳ぜんそくは、気管支に炎症を起こす風邪やインフルエンザにかかると発症しやすくなるといわれています。季節の変わり目や冬の寒い時期などは特に、手洗いやうがい、マスクの着用などでその感染を防ぎましょう。

気管支を刺激するタバコを控えることは、重要な対策のひとつです。ストレスを受けると気道が過敏になり、咳が出やすいので、受けたストレスを発散することも大切です。

また、年々増加しているこの病気は、アレルギー体質の人に多い傾向があります。こまめに掃除し、ハウスダストや家ダニ、カビといったアレルギーを引き起こす原因を生活の場から取り除くことも予防につながります。

